

# 三遊亭円朝の人情噺における人称代名詞の考察

三十四回生 那 須 小代美

## △目次▽

### 序

### 第一章 三遊亭円朝の人情噺

#### 第二章 一人称代名詞

##### 第一節 登場人物の男性達が用いる一人称代名詞

- (一) 概略
- (二) 武士が用いる一人称代名詞
- (三) 学者・僧侶・易者・盲人・画家が用いる一人称代名詞
- (四) 町人上流階級が用いる一人称代名詞
- (五) 町人下流階級が用いる一人称代名詞
- (六) 複数形

##### 第二節 登場人物の女性達が用いる一人称代名詞

#### 第三章 二人称代名詞

##### 第一節 登場人物の男性達が用いる二人称代名詞

- (一) 概略
- (二) 武士が用いる二人称代名詞
- (三) 学者

#### 第四章 三人称代名詞・不定称代名詞

##### 第一節 登場人物の男性達・女性達が用いる三人称代名詞

##### 第二節 登場人物の男性達・女性達が用いる不定称代名詞

#### 第五章 まとめ

### 結

## 序

三遊亭円(圓)朝は天保十年(一八三九)に江戸湯島に生まれ、明治三十三年(一九〇〇)六十一歳で没している。明治維新を二十九歳で体験するという、時代の大きな転換のなかで生涯を送った人物である。その円朝の人情噺に表れてくる人称代名詞の一面を明らかにしようとするのが本稿である。

作業、分析の結果の報告の前に、三遊亭円朝の生涯、彼の速記本について探り、言語資料としての円朝の人情噺の性格を明確にしておく必要を感じている。

ここで取り上げたのは「真景累ヶ淵」(二十歳の作、刊行年不詳)、「怪談牡丹燈籠」(二十二歳から二十五歳までの作、明治十七年刊)、「名人長二」(明治二十八年刊、唯一の自筆)、「英国孝子之伝」(明治十八年刊、唯一明治を背景)、以上六作品である。

なお、これは卒論要旨であるため、言葉の足りない点も多いことと思う。

### 第一章 三遊亭円朝の人情噺

私が今回調査した六作品中、五作品までが速記本である。速記本と口演とのずれを指摘する論も多い。(文献1. 2. 3. と対をなす4. 5. 6. など)が、私の分析は「人称代名詞」に限って行なうので、その部分でのずれは殆ど無いものとして進めていってもよいと考える。(しかし、後の分析において、「私」の場合のように、「わたし」か「わたくし」

か、振り仮名が一定しない、もしくは無いため、詳察に至らない点もあった。このような記述上の問題点は含んでいるが、ここでは別の問題として予め断っておく。)

また、速記本の刊行は明治であり、五作品が江戸期を背景としている。そして、円朝の言語形成期は幕末である。

登場する武士の物言いに、らしからぬ所も出てくるが、その作為については、聴衆が熟知しているところの実際の物言いを再現したのであろう、との松山義夫氏の分析(文献6)がある。

時代区分からすると、微妙な位置の作品群であり、言語である。江戸期の言語とも、明治期の言語とも言い切れない。が、明治初頭の言語様相、詳述するならば、円朝と同時代を生きた人々、幕末からの流れを受け継ぐ人々の、明治初頭における言語観、とでもいうものがあらわれていよう。

待遇表現の一現象である人称代名詞は、人間関係の把握の仕方の表れといえる。微妙な人間関係の類型化は容易ではない。しかし、概観するために、次の、山崎久之氏の身分型を参考にさせていただいた。

(1) 武士ことば(男・女)

(一)学者ことば (二)僧侶ことば (三)易者ことば (四)盲

人ことば

(2) 町人ことば(男・女)

(3) 遊里ことば(男・女) (「粹ことば」を含む)

(山崎久之「江戸の庶民語の待遇表現の体系(1)」文献7)

このうち、町人、なかでも下層階級に属する人々の数が圧倒的に多かった。

なお、調査の底本は次の通りである。

「怪談牡丹燈籠」 「怪談乳房榎」 ー「円朝怪談集」 (筑摩書房 筑摩叢書 87 昭和42年初版 昭和60年初版復刊)。  
 「真景累ヶ淵」 「塩原多助一代記」 「名人長二」 「英国孝子之伝」 ー「三遊亭円朝集」 (筑摩書房 明治文学全集 10 昭和40年)。

## 第二章 一人称代名詞

### 第一節 登場人物の男性達が用いる一人称代名詞

#### (一) 概略

この節では男性使用のものをとりあげる。まず全体をながめ、身分の相違による差異へ移っていききたい。

なお、会話の中の会話(自分の昔の言葉や人の会話を伝えるもの)は、話し手の人格が影響することを恐れて、整理した表からは省いてある。また先にふれたが、読みを明らかにできなかった「私」の存在を断っておきたい。

表の体裁は、上の欄が聞き手が男性で、数の多いものから、下の欄が聞き手が女性で、語は対応させてある。「英国孝子之伝」を除いて、作品は、ほぼ円朝が世に発表した順番による。

数を追って整理しただけなので、登場人物の現れる頻度により偏りがあるかもしれない。が、人物は多岐にわたり、町人層が主流なので、数が多い一般的なものである、で論を進

めても許されると思う。

表 I - 1

														一人称代名詞		作品		
わ	私	わたくし	わたし	おれ	わ	わ	わ	わ	わ	わ	わ	わ	わ	わ	わ	わ	わ	わ
1	1	2	1			3	2	1	17	22	25	117	1	2	92	71	真景累ヶ淵	
				3	2	2	6	18	3	34	21	29	5		128	2	怪談牡丹燈籠	
				1	2		3		3	14		53	10	1	30	43	怪談乳房榎	
				1			7	1	38	5	13	45	12	16	10	139	塩原多助一代記	
									11		21	28	7	23	5	7	名人長二	
					5		1	47		2	11	9	5	1		30	英国孝子之伝	
1	1	2	2	4	9	12	13	66	72	77	91	281	40	43	265	292	計	

														一人称代名詞		作品		
手前ども	身ども	我々	自分	おら	おいら	わ	私	拙者	お	手前	わ	お	わたし	わたくし	私	わ	わ	わ
1					1		1	3	2	4	13	47	3	25	92	34	真景累ヶ淵	
				1	2	1	3		4	7	2				41	1	怪談牡丹燈籠	
		1						1			5		5		19	1	怪談乳房榎	
				1					25	1		16	2		5	69	塩原多助一代記	
			1						3		4	4			12		名人長二	
											14	3	9			23	英国孝子之伝	
1	1	1	1	1	3	1	4	4	4	37	12	31	115	14	25	169	128	計

表 I-1 より、男性が一般に多く用いるのは、「わし・わたくし・わたし・おれ」次いで「わっち・てまえ・おら」になろう。

「僕」は特殊である。時代背景が明治の「英国」から三分の二を占める。残る二十三例中、二十一例までが、「怪談牡丹燈籠」のお幫間医者、山本志文の発言中で、もう一例は志文と会話中の人物である。そして、残り一例は、物識先生と称される人物で、円朝との会話中であり、明治に入ってからのもと思われる。「英国」においても、用いるのは二人に限られる。

森川知史氏の「安愚楽鍋」の調査（文献 8）においても、教養層の者の所用のみ、とある。

これらより、「僕」は幕末においては一般には用いられず、「英国」の頃（背景明治四、五年―十一、二年 刊行明治十八年）も、限られた層の言葉であったと考えられる。

「わし」は最も数の多かったものだが、地方者に特に多かった。このことは、小松寿雄氏「近代の敬語Ⅱ」（文献 9）で、江戸後期では、その数は多くなく、年配層に残っている、とあったことでも裏付けられよう。

(二) 武士が用いる一人称代名詞

表の聞き手は男性に限っているが、女性との会話に一例、「身ども」がみられた。

表 I-2 より、武士が最も多く用いるのが「手前」、次に

表 I-2

予		人称代名詞							聞き手	
		わ	私	拙	お	わ	わ	私		手
	れ	1	2	4	1	12	6	23	23	武士
					1			5	1	学者・僧侶・易 者・盲人・画家
				2		1		3	5	町人上流階級
2		1	1	5	28	21	9	30	34	町人下流階級
2		2	3	11	30	34	15	58	63	計

「わたくし」か「わたし」、そして「わし」。「おれ」と続く。「おれ」は、下流階級と話す際に偏って使われているのが目に付く。

武士の言葉は新しい表現が少なく、変化が少ないといわれる。(文献 9 など)そこで、辻村敏樹氏の「敬語変遷一覧表」(文献 10)と照らし合わせてみると、「私共」のみ、みられなかったが、「わたし」を除く他の語は近世以前の成立であることがわかった。

(三) 学者・僧侶・易者・盲人・画家が用いる一人称代名詞  
山崎氏が武士に準ずる言葉使いをなす者としてあげられていた層である。

武家詞の「拙者」が一例みられる。他の階層には用例はない。

逆に、武家詞の「拙者」と食い違う「おら」が、長屋住

まいの易者の言に一例みられる。

お ら	拙 者	わ し	お れ	わ た く し	私	人称代名詞	
						聞き手	
				1	2	武	士
					3	学者・僧侶・易 者・盲人・画家	
	1		4			町人上流階級	
1		4	5		7	町人下流階級	
1	1	4	9	1	12	計	

表 I - 3

(四)町人上流階級が用いる一人称代名詞

表 I-4より、「おれ・わし・わたくし・わたし」がよく用いられる。

このうち、「おれ」は町人との会話に集中しているのに対し、「わし」はどの層にも用いられている。

「おら」を用いるのは地方の上流階級であった。「手前」は僅数だが、武士に対する用例のみで、改まった表現と考えられる。

手 前	お ら	私 共	わ た し	わ た く し	私	わ し	お れ	人称代名詞	
								聞き手	
2	1	1	1	7	2	14	1	武	士
					5			学者・僧侶・易 者・盲人・画家	
	3	3		1		11	15	町人上流階級	
	1	1	8	1	12	12	23	町人下流階級	
2	5	5	9	9	19	37	39	計	

表 I - 4

(五)町人下流階級が用いる一人称代名詞

表 I-5より、語彙の豊富なこの層で、多いのが「おれ・わし・わたし・わたくし」である。

「おいら」は近世後期洒落本の寺島浩子氏の調査(文献 11)によると、よく使われ、前出「安愚楽鍋」の調査(文献 8)によると、使用者は限られるが、用例の多いものとなっている。が、私の調査では、用例は少ない。

わ っ し	手 前 方	私 ど も	わ し ら	わ れ	お い ら	手 前	僕	わ っ ち	お ら	わ た し	わ た く し	私	わ し	お れ	人称代名詞	
															聞き手	
		1	1	3	1	3	6	8	8	4	12	77	59	46	武	士
	1					2		9		1		3			学者・僧侶・易 者・盲人・画家	
1							33	34	4	8	5	8	74	5	町人上流階級	
		2	1	1	3	3	12	15	54	3		75	36	133	町人下流階級	
1	1	3	2	4	4	8	51	66	66	16	17	163	169	174	計	

表 I - 5

表 I - 6

わ し ら	ど 手 も 前	ど わ っ ち	ど わ た し	し わ ど た く	人称代名詞	
					作品	
					真	景累ヶ淵
			1	2	怪	談牡丹燈籠
	1				怪	談乳房榎
		1			塩	原多助一代記
				1	名	人長二
1					英	国孝子之伝
1	1	1	1	3	計	

(六) 複数形  
現在では多用しない「ども」を付したものが多し。

お れ 達	わ し ら	人称代名詞	
		作品	
		真	景累ヶ淵
		怪	談牡丹燈籠
		怪	談乳房榎
		塩	原多助一代記
1		名	人長二
1	3	英	国孝子之伝
		計	

第二節 登場人物の女性達が用いる一人称代名詞  
遊里の登場のないこの作品群においては、女性はまだめて扱っていくこととした。

表 I-7 より、「わたし・わたくし」が圧倒的に多い。この二語を常用するのは、武家、商家の、屋敷者、とでもいえる人々に限定できる。

対して、「わし・おら・おれ・おいら」などは地方出身の者の使用が目立つ。

江戸後期に頻用されたという「わっち・わたい」の用例

表 I - 8

わ し ど も	わ た し ち ち	わ た し ど も	わ た く し ど も	人 称 代 名 詞
				作 品
				真 景 累 ケ 淵
	1	2		怪 談 牡 丹 燈 籠
				怪 談 乳 房 榎
1	1	1	1	塩 原 多 助 一 代 記
			4	名 人 長 二
				英 国 孝 子 之 伝
1	2	3	5	計

はない。「安愚楽鍋」  
 (文献8)でも水商  
 売関係者の使用に限  
 られていた。とある  
 ので、用例0もその  
 理由からだろう。  
 複数形は、表をあ  
 げるにとどめる。

表 I - 7

自 分	手 前	お い ら	わ し ら	お ら	私 ど も	お れ	わ し	わ た く し	わ た し	私	人 称 代 名 詞
											作 品
1				4	2	5	7	16	2	192	真 景 累 ケ 淵
								31	88	1	怪 談 牡 丹 燈 籠
										23	怪 談 乳 房 榎
		2	1		2	3		45	49		塩 原 多 助 一 代 記
			1					13	6	3	名 人 長 二
	1							1	17	7	英 国 孝 子 之 伝
1	1	2	2	4	4	8	21	115	155	216	計

お ら	お れ	わ し	わ た く し	わ た し	私	人 称 代 名 詞
						作 品
3		1	2	3		16
				1	14	
				1	10	2
				2		
		2	5	11		
3		1	4	12	35	18

第三章 二人称代名詞  
 第一節 登場人物の男性が用いる二人称代名詞  
 (一) 概 略  
 表II-1は、I-1-7と同じ体裁であってある。  
 最も多いのが「お前」、そして「あなた・おめえ・てめ  
 え・あなた・お前さん・手前」などである。  
 「君」は一人称での「僕」と同じ性格をもつ。  
 一例みられる「わぬし」は上方の人の言中にある。(注1)  
 が、この語は「敬語変遷一覽表」(文献10)では中世前期  
 までに消えたことになっている。また、似た語の「おぬし」  
 でも近松の世話物の調査(文献12)では一般的だが、後期  
 上方板洒落本の調査(文献13)では見当たらない。  
 一例のみなので、いろいろな可能性が考えられるが、疑  
 問の残る点である。  
 洒落本で最も多く使われる類(文献11より)の「ぬし」  
 は一例もみえない。「安愚楽鍋」の調査でもふれられてい  
 ないので、衰微したと考えられる。

わぬし	尊君	貴君	貴方	それがし	そなた	尊公	貴殿	こちら様	汝	貴公	あなた様	おのれ	そち	おめえ様	そのほう	おめえさん	お前様	貴様	わ	お前さん	君	あんた	おめえ	あなた	手前	てめえ	お前	人稱代名詞 作品
1			1							3	1	1	1	2	26	3	14	6	28		13	64	21	27	60	43	真景累ヶ淵	
				1				3	1	2	7	1	2	1	8	4	1	16	1	10	26		8	27	44	7	79	怪談牡丹燈籠
						1		1	4		1	7	6	25			33	7		2		11	2	13	18		65	怪談乳房榎
					2								6					4	43	16		53	17	23	8	17	37	塩原多助一代記
						2				1			8	24	3					2				3	8	18	3	名人長二
	1	1					3			1	1	1				2			2	7				10	1	6	8	英国孝子之伝
1	1	1	1	1	2	3	3	4	5	7	9	10	23	27	34	35	37	41	52	65	77	89	92	97	106	108	235	計

うぬ	おめえ	貴公様			貴方						あなた様			おめえ様	そのほう	おめえさん	お前様	貴様	わ	お前さん	君	あんた	おめえ	あなた	手前	てめえ	お前	人稱代名詞 作品	
2	3	3			10									1		2		2		32		17	23	11	7	19	71	真景累ヶ淵	
										2						1	1	3		1	1		10	13	8	14	7	7	怪談牡丹燈籠
										2							1							10	3		3	怪談乳房榎	
														6		7		2	3	1			44	18		1	11	塩原多助一代記	
															5									2		1			名人長二
																				10			10		9		6	英国孝子之伝	
2	3	3			10						4			7	5	10	2	7	3	44	1	71	53	43	20	33	98	計	

(二) 武士が用いる二人称代名詞

君	それがし	尊公	手前方	お前さん	われ	そなた	貴公様	てめえ	貴公	おのれ	貴方	あなた	そち	貴様	そのほう	手前	お前	人称代名詞	
																		聞き手	
					1	2			2	8	3		1	2	5	3	武	士	
										1		4		1	7	2	学者・僧侶・易 者・盲人・画家		
									1		5				2	4	町人上流階級		
1	1	1	1	1			3	4	5	3	7		13	29	27	90	92	町人下流階級	
1	1	1	1	1	1	2	3	4	5	6	8	8	12	13	31	36	99	99	計

「お前・手前」が最も多く、次に「そのほう・貴様」、そして「そち・あなた」ということになる。

現在、侮蔑の意の「きさま」は上位者から下位者は、普通の場合状態で用いられるのが殆どである。

また、「あなた」は目下には使えない語であったようだ。

五例しかない「汝」

のうち、「怪談牡丹燈籠」の一例は、「円朝怪談集」では「汝」だ(注2)、「明治文学全集」では「手前」だった(注3)。発言者飯島と孝助の前後のやりとりより、「手前」の方が自然に思われる。残る四例は、「真景累

ヶ淵」の菱川重信の霊としての発言中にある。振り仮名は一例のみで、後に「汝」も出てくるため、三例は、はっきりしない。  
このため、「汝」を武士が用いた二人称代名詞に入れることは無理か、と考える。

(三) 学者・僧侶・易者・盲人・画家が用いる二人称代名詞

そち	おめえ	てめえ	手前	お前さん	貴様	あなた	お前	人称代名詞	
								聞き手	
				3		7	6	武	士
						2	1	学者・僧侶・易 者・盲人・画家	
2			1					町人上流階級	
	2	2	3	2	5	16		町人下流階級	
2	2	2	4	5	5	9	23	計	

表II-3

この層は、「お前」が最も多い。  
次に多い「あなた」は、武士と同じく、町人(武士は町人上流階級に対し用例がみられる)には用いていない。目下に使わない武士の用法に一致する。

(四) 町人上流階級が用いる二人称代名詞

表II-4より、「お前」がやはり最も多い。次が「われ」なのは、この層の特徴である。が、地方名士達が互いに使うものに多いので、江戸町人の言葉とは開きがある。

表Ⅱ-4

人称代名詞		聞き手										
あなた様	おめえ様	貴様	おめえら	てめえ	手前	あなた	お前さん	おめえ	あんた	われ	お前	武士
1						1	2		10		2	学者・僧侶・易者・盲人・画家
							4	1	6	13		町人上流階級
	1	1	2	2	6	5	8	13		4	34	町人下流階級
1	1	1	2	2	6	10	11	13	16	17	36	計

ここでは、下流階級に対する「あなた」がみられる。一例ある「あなた様」がその上の格を表すようになってきたのかもしれない。

表Ⅱ-5

人称代名詞		聞き手																			
貴君	尊君	おめえら	おのれ	うぬ	貴方	貴様	手前	こちら様	あなた様	君	おめえ様	われ	おめえさん	お前さん	お前様	あなた	あんた	お前	おめえ	てめえ	武士
					2		2	4	5	9	24	4	8	6	26	23	19	13	7	6	学者・僧侶・易者・盲人・画家
									2	1						1		1			町人上流階級
1	1												17	4	4	2	39		1		町人下流階級
		1	1	2		3	2		16	2	25	7	22	7	14	9	59	68	72		計
1	1	1	1	2	2	3	4	4	7	26	26	29	33	35	37	40	67	73	76	78	

(五) 町人下流階級が用いる二人称代名詞  
「てめえ・おめえ」が最も多く、「お前・あんた」と続く。

「てめえ・おめえ」と原形の「手前・お前」を表Ⅱ-5で比べてみる。と、先の二語が町人下流階級に偏って使われていることがわかる。

他の派生語を、表Ⅱ-5より、敬語意識の高い順に並べると、「お前様・おめえ様・お前さん・おめえさん・おめえら」ということになる。

一人称と同じく、この層は語彙が豊富である。武士も二人称においては、その格式ゆえにかなり豊富であるが、新しい語を成してゆくために語彙が豊富なこの層とは対照的である。

(六) 複数形

表Ⅱ-6のように、男性の使う二人称複数形は、単数形に比例して語彙が多い。表をあげるにとどめる。

第二節 登場人物の女性達が用いる二人

称代名詞

「お前」、次に「あなた」そして「お前さん」と続く。

表Ⅱ-7

お 前 方	お 前 様	あ な た 様	お め え 様	て め え	手 前	あ ん た	お め え さん	お め え	わ れ	お 前 さん	あ な た	お 前	人称代名詞	
													作 品	
1	1		1		1	5	1	7	20	44	24	97	真景累ヶ淵	
		3									56	98	怪談牡丹燈籠	
										2	46	3	怪談乳房榎	
			2	3	3	4		4	1	27	35	50	塩原多助一代記	
						10				16	1	15	名人長二	
						1				8	31	1	英国孝子之伝	
1	1	3	3	3	4	10	11	11	21	97	193	264	計	

表Ⅱ-6

わ れ ら	て め え ら	お め え ら	お め え 方	お 前 さん たち	そ の ほ う ど も	あ ん た 方	あ な た 方	手 前 た ち	貴 公 た ち	人称代名詞	
										作 品	
		1		1							真景累ヶ淵
	1							3			怪談牡丹燈籠
											怪談乳房榎
1			1			1					塩原多助一代記
					1				8		名人長二
							1				英国孝子之伝
1	1	1	1	1	1	1	1	3	8		計

て め え	あ ん た	お め え	わ れ	お 前 さん	あ な た	お 前	人称代名詞	
							作 品	
	1		7	2	3	4	15	真景累ヶ淵
						4	5	怪談牡丹燈籠
						1	2	怪談乳房榎
1	1			4	5	12		塩原多助一代記
								名人長二
				1	2	7		英国孝子之伝
1	2		7	2	8	16	41	計

貴 様 た ち	お 前 さん 方	お 前 方	お 前 た ち	そ の ほ う ど も	あ ん た 方	て め え た ち	手 前 た ち	あ な た 方	人称代名詞	
									作 品	
										真景累ヶ淵
	1					1	2	1		怪談牡丹燈籠
										怪談乳房榎
1			1		1					塩原多助一代記
				1						名人長二
		1						1		英国孝子之伝
1	1	1	1	1	1	1	2	2		計

表II-8

あなた方	お前方	んお前方	お前さ	さんお前へ	人称代名詞	
					作品	
					真景累ケ淵	
	1				怪談牡丹燈籠	
					怪談乳房榎	
1					塩原多助一代記	
			2	2	名人長二	
					英国孝子之伝	
1	1	2	2		計	

あなた方	お前方	んお前方	お前さ	お前たち	人称代名詞	
					作品	
				1	真景累ケ淵	
	2			4	怪談牡丹燈籠	
					怪談乳房榎	
1			3		塩原多助一代記	
					名人長二	
					英国孝子之伝	
1	2	3	5		計	

屋敷者が用いるのは、「あなた・お前・あなた様・お前さん」の四種である。それ以外の者たちは「おめえ・てめえ・われ・おめえさん」等の男性的なものが目立ち、屋敷者との差が著しい。(ただし、「お前」に関してはあまり差がない。)

「お前」は、上品な言葉使用をされるとされる屋敷者たち(文献14)も用いている。しかし、目下かごく親しい者に対してのみである。

表II-8に、複数形をあげておく。

第四章 三人称代名詞・不定称代名詞  
 第一節 登場人物の男性達・女性達が用いる三人称代名詞

表III-1

御方様	先方	さき	其奴	やつ	それ	そいつ	此奴	彼奴	かれ (彼女)	こいつ	これ	あいつ	あれ	人稱代名詞 / 話し手
	1		1	3	4	5	6	5	11	12	29	45	54	男
1		1			1			3			5	7	6	女
1	1	1	1	3	5	5	6	8	11	12	34	52	60	計

表III-2

かの人	その娘	その方	その人	この者	この方	おこの人	方おの	あのお	あの人	おこの人	おこの方	かのお男	あのお男	おこの方	あの方	この人	あの人	人稱代名詞 / 話し手
1	1	1	1	1	1	1	1	1			1	3	3	4	2	5	8	男
					1		1				2	1			2	1	7	女
1	1	1	1	1	1	1	1	1			2	3	3	4	4	6	15	計

表III-3

やつら	そいつら	あいつら	こいつら	こやつら	その者	彼ら	人稱代名詞 / 話し手
1	1	1	1	1	2	3	男
							女
1	1	1	1	1	2	3	計

この章で扱うものは、いずれも用例が少ない。ゆえに、使用者が男性か女性かだけでまとめた表をあげることにした。

表III-1は三人称代名詞を、表III-2は同じく三人称代名詞であるが、「の」を介しているもの、表III-3は複数形である。合計し

た数の多い順に並べてある。

表Ⅲ-1では、「あれ」が最も多く、「あいつ・これ」と続く。

「彼奴」「此奴」「其奴」は、「かやつ・きゃつ」「こやつ・こいつ」「そやつ・そいつ」と読みがはっきり判らないので、そのままあげてある。

江戸後期洒落本の調査（文献11）で三人称としてあげられる「あなた」はここには無い。円朝の頃には完全に二人称化していたようである。

また、「彼女<sup>かれ</sup>」という表現はみえるが、「かのじょ」と語ったであろうものはみあたらなかった。

表Ⅲ-3の複数形では、「その者ども」を除き、「ーら」の形のものであった。

## 第二節 登場人物の男性達・女性達が用いる不定称代

### 名詞

何といっても多いのが「誰」である。一例ある「だり」

も「誰」のなまったものである。

「誰」の殆どは振り仮名が無く、「だれ」か、「たれ」かをはっきりさせることはできなかった。

また、「誰」に比べ、「どなたどなたさま・どちらさま」は丁寧な表現で、「どいつ」はぞんざいな表現であったと考えられる。

作品	人称代名詞		誰		どなた		どなたさま		どちらさま		どいつ		だり	
	男	女	115	26	10	7	7	4	1	1	1	1	1	1
計			141	17	11	17	11	11	1	1	1	1	1	1

## 第五章 まとめ

全体を通して気付く点を並べてみよう。

まず、現在に比べ、人称代名詞の語彙が豊富なことがあつた。特に男性が用いるものの種類が多い。封建時代における、すぐれて家を守る者としての女性の位置から、女性は社交範囲が狭くなり、豊富な語彙をもつ必要がなく、男性より語彙が少なくなっていると考えられる。また、身分差が少なくなっていると考えられる。また、身分差があつた時代ゆえ、語彙が豊富になつたといえよう。

次に、身分の別による言葉の違いが大きかつた、ということがあつた。

特に、武士の格式ばつた物言いからくる、二人称代名詞の豊富さ、新しい人称代名詞の少ないこと。対照的に、町人下流階級の、音訛からくる新しい人称代名詞などをも含めて全体に語彙の多いこと。そして、女性の、屋敷者の丁寧な表現と、それ以外の者の、現在では男性語的な人称代名詞の使用。

さて、江戸後期の論述（洒落本の調査など）や、「安愚楽鍋」の調査と比較してきた。双方にあてはまるところは多いが、片方にしかあてはまらないものも多かった。同じ明治期に発表された「安愚楽鍋」に共通点の多いのは自然なことだが、時代背景と登場人物の差からであろうか、相違点もみられるのである。これは、円朝の断における言語が微妙な位置に立っていることの裏付けにならう。

結

円朝、人情晰の人称代名詞についての調査報告をここで  
終えたい。

用例数の調査を基本として、先学の論と比較参照して、  
ここまで述べてきた。このような本格的な調査に取り組ん  
だのは初めてなので、不備のあろうことを恐れている。

名人と呼ばれる三遊亭円朝の晰を、耳にすることはでき  
ないが、残された速記本によって接することは可能である。  
今回の調査を通じ、個々の人格を綿密に表現していく円朝  
の力量は、例えば人称代名詞の使い方にもよく表れている  
ことが、改めてはつきりしたように思う。

△注▽

注1 偶然して足を付けられてはならんから、夜さり夜中  
に窃と明けて、汝と二人で代物を分けるが宜ワ。(上  
方の人↓妻「真景累ヶ淵」「明治文学全集」P 216)

注2 汝は武士の種だということだからよもさような死に  
ようはいたすまいな。(飯島平左衛門↓孝助「怪談  
牡丹燈籠」「円朝怪談集 P 71」)

注3 注2と同言中、汝↓手前。(明治文学全集 P 37)

△参考文献▽

文献1 進藤咲子「三遊亭円朝の語彙」『怪談牡丹燈籠』

『講座日本語の語彙第六巻 近代の語彙』明治書

院 昭和57年

文献2 前田愛「円朝」明治の文体」『解釈と鑑賞』昭

和44年1月 至文堂。

文献3 清水康行「言語資料と『怪談牡丹燈籠』における二  
重性」『創立二十周年記念鶴見大学文学部論集』鶴見大学

文学部論集刊行委員会、昭和58年3月。

文献4 山本正秀『近代文体発生の史的研究』岩波書店、

昭和40年

文献5 亀井秀雄「三遊亭円朝」『国文学解釈と教材の研

究』學燈社、昭和53年

文献6 松山義夫「三遊亭円朝の「口演」における言語」

『滋賀県高校国語教育会誌』昭和43年3月。

文献7 山崎久之「江戸の庶民語の待遇表現の体系(1)―三

馬の作品を中心として」『群馬大学教育学部紀要』

昭和42年。

文献8 森川知史「明治開化期の待遇表現」『安愚楽鍋』

における敬語」『国文学論叢』昭和57年。

文献9 小松寿雄「近代の敬語Ⅱ」『講座国語史5敬語史』

大修館書店、昭和46年。

文献10 辻村敏樹「敬語変遷一覽表」『国文学鑑賞と解釈』

學燈社、昭和42年10月。

文献11 寺島浩子「近世後期上方語の待遇表現―動詞にか

かわる上方特有の表現法」『橘女子大学研究紀  
要』五号、昭和51年。

文献12 高松浩美「近松の世話物浄瑠璃に於ける待遇表現」

『国文』三一、昭和44年。

文献13

矢野準「近世後期京坂語に関する一考察」洒落本用語の写実性」、『国語学』107、昭和51年12月。

文献14

松村明『江戸語東京語の研究』東京堂、昭和32年。

興津要「解題」、『明治文学全集10 三遊亭円朝集』昭和40年。

田中章夫『東京語―その成立と展開―』明治書院、昭和58年。